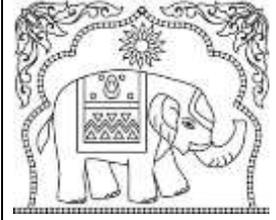




まいとりい मैत्री



No.17 平成24年度 夏号 -2012. 7. 25-
東洋大学教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌

< मैत्री > : maitri (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

《仏教サンスクリット写本を訪ねて》

5月2日に渡辺章悟先生の引率で東洋哲学研究所主催の「法華經—平和と共生のメッセージ展 “The Lotus Sutra—A Message of Peace and Harmonious Coexistence” Exhibition」を訪れた。当日はあいにく雨であったが、東洋大学からは藤井明、針貝京子、私ウルジーの三人と、さらに大正大学から二人の参加者を募ることができた。



この展示会は、現代社会へと通じる『法華經』の智慧を、豊富な写真やイラストによってわかりやすく紹介するとともに、『法華經』がどのようにして伝わってきたのか、その歴史を貴重な『法華經』

写本類によって紹介するものであった。とりわけ白樺の樹皮に丁寧に書写され、“世紀の発見”とも呼ばれる「ギルギット法華經写本」(複製)が印象的であった。この写本は6世紀から7世紀頃に書かれたもので、カシミール地方で発見された。仏教写本の中でも最古のものの一つとされる極めて貴重な資料である。

その他にも、中国語、モンゴル語、チベット語、古ウイグル語、ホータン・サカ語、西夏語など、諸言語に訳された『法華經』をはじめ多数の写本が展示されており、『法華經』に託された人々の願いを感じることができた。さらに、「飛天」「敦煌莫高窟」などの仏教文化・芸術にも光を当てて紹介していた。シアター・コーナーも開設され、法華七譬や、法華經の漢訳者・鳩摩羅什の生涯が分かりやすく映像で紹介されていた。さらに、漫画家の手塚治虫氏の『ブッダ』の原画(複製)も公開するなど、名実ともに“法華經を知る”魅惑的な展示会であった。

最後に一言加えると、私が研究を進めている『金光明經』の展示も印象的であった。西夏文字、西部モンゴル文字(トド文字)などで記された写本が展示されており、今後の研究を進めるにあたって大きな刺激を得る事ができたことは喜びである。

ウルジージャルガル (大学院仏教学専攻博士後期課程3年)

【目次】

仏教サンスクリット写本を訪ねて	……1	タイの仏教事情①	……6
聲明講演	……2	コラム「日本文化と仏教」⑮	……7
印仏学会探訪記	……2	書籍・イベント情報	……9
追悼：アダム・ヤウク氏	……4	今後の予定	……10
モンゴル仏教文化圏の諸事情③	……5		

《聲明公演》

～空間、そして身体へ響きわたる祈り～

6月2日土曜日、今年もまた井上円了ホールにおいて、東洋大学文学部伝統文化講座と銘打ち、聲明公演が開催された。今年度のタイトルは、「雲上の祈り・奈良長谷寺勤行」であり、またこの名前の通りに、今年度の聲明講演は、真言宗豊山派迦陵頻伽研究会の方々による「奈良長谷寺勤行」の再現を眼目とするものであった。更には、公演の始まる前に、東洋大学文学部非常勤講師である田中文雄先生による「長谷寺と観音信仰」といった今回の公演に関わる解説も行われた。



私自身は、聲明というものを初めて生で聞いたのだが、圧倒的であった。タイトル通りに、聲明はまさに祈りで、そのような祈りが、お香が焚かれたホール独特の空間内に響きわたる。そして、ホール全体に響きわたる祈りが、自分の身体へと届き、その中でも響く瞬間。この瞬間、私の仏教に対するイメージは大きく変わった。

私は、中学・高校とキリスト教系の学校に通っていたため、仏教についてはほとんど「無知」と言っても良く、また仏教へのイメージもある方向性において固定化されていた。だが、私がインド哲学科に入学してまだ2～3ヶ月であるものの、仏教にも沢山面白い所が有るといった驚きを味わう日々を送っている。今回の聲明公演もそのような新たな「知」の拡大といった機会の一つとなり、たいへんうれしい。そして、今回の公演の最後には、真言宗豊山派仏教青年会による方々の演奏で、太鼓による「六大響」があり、これもまた字の如く、大きくホール、そして私の身体に響きわたるものであった。

最後に、今回の文化講座に携わった方々のご尽力を労うと共に、心から感謝の意を表したい。

鈴木鉄平（インド哲学科1年）

《印仏学会探訪記》

日本印度学仏教学会 第63回学術大会に参加して

2012年6月30日（土）、7月1日（日）に日本印度学仏教学会（以下、印仏学会）の第63回学術大会が行われた。場所は川崎市のJR鶴見駅からほど近い、総持寺の敷地内にある鶴見大学で開催された。梅雨時の開催とあって雨が心配されたが、2日目午後には雨が少し降り始めたものの天候にも恵まれ、大盛況の大会であった。



東洋大学からは伊吹敦先生、沼田一郎先生、佐藤厚先生、昨年も発表されたオーダムさん（博士後期課程）、まいとりの「タイの仏教事情」の連載でおなじみのプラチャップンさん（博士後期課程）、仏教青年会会長の藤森晶子さん（博士後期課程）、三澤祐嗣さん（博士後期課程）らが個人発表をされていた。

今回、多くの関心を集めた発表は、第3部会の佐々木閑先生の「下田正弘とグレゴリー・ショペンー大乘仏教の起源をめぐる」と、それに続いての下田正弘先生の「初期大乘仏教の歴史をどうとらえるか」であった。その盛況ぶりは、部会が行われていた教室を、急遽大人数が収容できる教室に変更したほどであり、それでもなお立ち見が出て、外に人が溢れるほどであった。この大乘仏教の起源というテーマ自体、関心のある人も多いと思われるので、部会での個人発表ではなく、パネルという形で議論の俎上に載せてもよかったかもしれない。

佐々木先生の発表の内容は、ショペンについて批判というより、主に下田先生の大乗仏教起源説について、文献に拠っていないのではないか、という批判的意見であり、下田先生の論文、著書、発言等を綿密に調べた上

での指摘であった。批判の内容については、紙面に限りがあるため、やむなく割愛させていただくが、佐々木先生ご自身も他の先生方もおっしゃっていたとおり、佐々木先生と下田先生は旧来の大親友であり、犬猿の仲ではないということだけ付け加えておきたい。

下田先生の発表は、佐々木先生からの批判について回答する形ではなく、ご自身の作られてきた発表内容を予定どおり進めたという印象であった。下田先生が発表された後に、「(佐々木先生の批判について) 反論の論文を書かれるご予約はありますか?」と失礼ながらお聞きしたところ、いつもの柔和な笑顔で「(佐々木先生が) 論文にしてきたら、こちらも論文にしなければいけないだろうけど…。1 割位は当たっているけど、9 割位はニュアンスが違うんだよね」と困惑していらっしゃる様子であった。佐々木先生の批判が今後どのような展開をするかも気になる場所であるが、下田先生がどう反論されるかも気になる場所である。

それからご紹介が遅くなってしまったが、印仏学会では刊行された研究成果に対して毎年鈴木学術財団特別賞を贈っている。ここ数年受賞がなかったようだが、今年度は東洋大学仏教会会長である渡辺章悟先生のご著書『金剛般若経の研究』(山喜房佛書林、2009) が3年ぶりに鈴木学術財団特別賞を受賞された。誠に僭越ながらこの場を借りてお祝いを申し上げたいと思う。先生、受賞おめでとうございます!



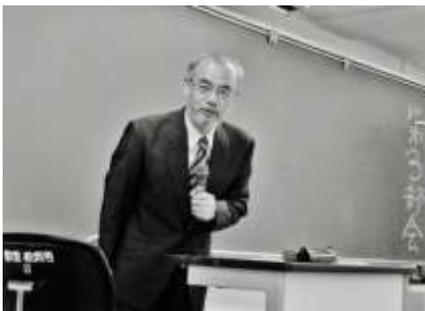
昨年以上の盛り上がりを見せた学術大会であったが、次回の第64回学術大会は、2013年8月31日(土)、9月1日(日)に島根県松江市で開催予定とのことである。印仏学会初の大学“以外”での学術大会開催となるが、島根県および松江市の全面バックアップとのことなので期待したい。

「なぜ松江で?」と思われる方もいらっしゃると思うが、松江市は故中村元博士の出身地である。今年は氏の生誕100周年だそうだが、それを記念して命日の10月10日に故郷の松江市に蔵書約3万冊を収めた「中村元記念館」が開館されるという。来年の学術大会は、発表等で新しい知見が得られるとともに、宍道湖や出雲大社などの観光地を巡ることもできるという一石二鳥の楽しみな大会になりそうである。

鮫島有理 (インド哲学仏教学専攻 博士前期課程2年)

仏教学は何をめざすのか

一昨年の立正大学(大崎)、昨年の龍谷大学(京都)に引き続き、今年も印仏学会に参加することとなった。今年の学会で最も印象に残ったことは、仏教学という学問そのものをめぐる熱い議論である。まずはじめは初日第三部会での「下田正弘とグレゴリー・ショペン」と題された、佐々木閑先生による下田正弘先生が近年主張されている大乘仏教起源説に関する発表である。これは特に下田先生の仏教学に対する研究姿勢そのものへの批判的検証が中心の発表で、文字通り白熱し印仏学会の歴史に残る一幕となった。下田先生も佐々木先生のご指摘を受けて



発表前に「あんなに熱く語れないよ…」(註: 筆者と鮫島は下田先生と並んだ席に座っていた。)とおっしゃいながらも仏教学のあり方について信念をもって明らかにし、両者譲らずという言葉がふさわしい結末となっただろう。かつては文献学の手法を重視する東大の印哲と哲学としての価値を重視する京大の印哲との間で激しい論戦が繰り広げられた話はよく耳にするところであるが、下田先生と佐々木先生の議論は内容こそ違えども、まさしくかつての両校の激論を彷彿させるものであった。

二日目のパネル発表では鶴見大学学長の木村清孝先生が企画された「仏

「教学は何をめざすのか」というパネルが人気を博していた。パネリストは下田正弘先生と、金剛大学（韓国）の金天鶴先生、国際仏教学大学院大学の津田真一先生と、立正大学の三友健容先生で、それぞれの先生方が独自の視点から仏教学のあり方について熱く語り尽くした。下田先生は、先生ご自身が近年取り組んでおられる仏教文献資料のデータベース化についての成果と展望について発表され、コンピューター技術の進化に伴い仏教における「知」のありかたが大きく変わりつつあるという説得力のあるお話をされていた。金天鶴先生は韓国における



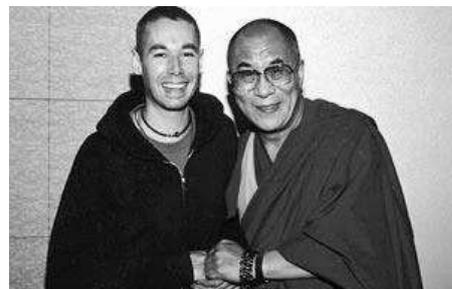
仏教学の諸問題について、日本や欧米の研究成果に頼ってきたこれまでの仏教研究が大きく転換期をむかえ、さらに人を癒やすことすなわち、「治癒の人文学」として社会へのかかわりが求められているとした。津田先生は「開放形の仏教学」と題して独創的な視点から近代仏教学のあり方を批判的にとらえ直す、たいへん力のこもった話をされていた。三友先生は「仏教と仏教学」という題目で、仏教学の成果によって仏教を正しく理解し、正しく実践して検証し、その成果を社会に還元していかなくてはならないとの主張をされていた。

このパネルの活発な議論を通して、私自身仏教学は何を目指すのかについて深く考えさせられた。とにかく時代の趨勢としていかなる学問であってもその専門的知識は細分化の一途をたどり、研究の成果も専門外の人にはほとんど理解ができない状況になりつつある。しかし一方では、洪水のように膨大な情報の中にあっても的確に有用な情報を捉え、それらを独自の発想で自ら組み立てる力が求められているのではないかと考える。仏教学はそもそも人文科学の学問である。人文系の学問には結局のところ、細分化された研究成果を何らかのかたちでリンクさせ多くの人々の知的欲求に応え、広い意味での生きる糧を提供することが期待されているものと考えられる。仏教学もよくよく考えればそのような学問の一つであったはずであるし、これからもそうであるべきなのだろう。確かにコンピューター技術の進化により参考文献やテキストの検索も容易になり、仏教学研究の手法は大きく変わっている。しかしどれほど研究環境が変わろうとも、仏教学という学問が諸々の学問体系においていかなる位置にあり、そしていかなる意義を担うものなのかを見失うことはあってはならないと切に思う。

鈴木伸幸（インド哲学科4年）

《追悼：アダム・ヤウク氏》

私のように、ラップ・ミュージックに然程興味のない人でも、「ビースティー・ボーイズ」という名前くらいは聞いたことがあるだろう。1978年から活動を開始し、白人ヒップホップの草分け的バンドとして有名だ。そのリーダー的存在である、アダム・ヤウク氏が、3年の闘病の末、今年の5月4日に亡くなった。47歳という若さであった。



彼は、ニューヨーク生まれニューヨーク育ちのユダヤ系アメリカ人だが、1997年にチベット系アメリカ人の女性、デチェンさんと結婚し、一人娘のテンジン・ローセルちゃんをもうけた。その数年前、ヤウク氏がヒマラヤ山脈旅行の際、チベット仏教徒に出会ったことを契機として、1992年に仏教徒に改宗したと言われているが、実際のところ不明である。ともあれ、彼が仏教同調者として、積極的に活動し、発言をしてきたことは事実である。彼は、非営利団体であるミラレパ基金を創設し、チベット解放運動を金銭的に支援してきた。ミラレパ基金は、チベットの人々のサポートはもちろんのこと、チベットの問題を世間にアピールし、それ以外にも、国際慈悲と非暴力主義を広めるために、若者がより興味を持つことが出来るように音楽、映画、イベントを通して活動が続いている。そんなミラレパ基

金の活動の中でも、チベタン・フリーダム・コンサートは世界中の人々にチベット問題をアピールすることに成功した。このチャリティー・コンサートは、1996年にサンフランシスコにて第1回が開かれ、その後、全国的・世界的規模で行われている。彼はまた、映画製作・配給会社オシロスコープ・ラボラトリーズの設立者でもあり、映画の世界でも活躍していた。ヤクウ氏は、実に多方面に渡り、多くの人びとに多大な影響を与えた偉大な人物である。そんな彼が、47歳という若さでこの世を去ったのは、とても悲しく残念なことだが、彼の意志を継ぐ人びとの手によって、彼の残した偉業は、今後も新しい展開を見せてくれるだろう。そして自分自身も、小さくとも何か貢献できる人間になりたいと思う。そんな期待に心を膨らませつつ、ヤクウ氏のご冥福を心より祈りたい。

梅田愛子（インド哲学科4年）

～モンゴル仏教文化圏の諸事情③～

—ブリヤートの仏教事情—

モンゴル仏教文化圏は大別すると三つの地域に分けられる。第一は、中国の内モンゴル自治区および、青海省・新疆ウイグル自治区・甘粛省のそれぞれの一部を含む地域である。第二は、モンゴル国である。そして、第三は、ロシア連邦のブリヤート共和国とモンゴル人民共和国の西北に位置するトヴァ共和国及び、ヨーロッパ唯一の仏教国といわれるカルムイク共和国などである。

その中で、今回はロシア連邦のブリヤートの仏教事情について紹介したい。

ブリヤート人は、ブリヤート共和国イルクーツク市のウスティオルダ・ブリヤート自治管区、チタ市の自治管区、アギンスキー・ブリヤート自治管区の三つの行政区画にまたがり生活している。ブリヤートではもともとシャーマニズムが盛んであったが、16世紀末からブリヤート人の間に仏教が広がり始めたと言われている。現地の信仰と仏教が習合し、その結果として、ブリヤート仏教の独自の融合形態が出来上がった。

1707年に、ブリヤートにおける最初の仏教寺院サルトルスキーが建立された。その後、1741年ロシア皇帝エリザヴェータ1世がブリヤートにおいて仏教の布教を許可する布告を行った。それ以降、20世紀前半にいたるまでブリヤート共和国には44ヶ所の仏教寺院が建立された。そしてまた、ブリヤートでは仏像やマンダラなどの仏教美術作品が盛んに制作された。また、積極的に文学作品などの出版活動が行なわれた。しかし、1937年から1938年にかけてソ連のスターリンによる大規模粛正に伴う仏教弾圧がおこなわれ、国内にある44ヶ寺の殆どが閉鎖、破壊された。また、国内にいる一万人以上の僧侶が逮捕、投獄され千人以上の僧侶が銃殺された。

第二次世界大戦後の1946年に、スターリンの法令によって閉鎖されていたアギンスキー寺院の復興が許可され、新しい仏教寺院、イヴォルギンスキー寺院が建てられた。以来、イヴォルギンスキー寺院はブリヤート仏教の中心地、総本山としての役割を果たしてきた。若い僧侶を育成す

るため、1970年から1991年にかけて、モンゴル国の首都ウランバートルの仏教学院に定期的に学僧を派遣して教育を受けさせた。1992年に、ダライ・ラマがブリヤートを訪問した際、首都ウラン・ウデを中心に、尼僧院、仏教大学、市民のための仏教施設をつくることを指導した。現在、ブリヤート人の8割が仏教を信仰していると言われている。2002年まででブリヤート共和国には168の宗教組織があり、そのうちの40が仏教寺院や仏教コミュニティである。近年、ブリヤートの仏教界はゲルク派以外にもカルマ派、カギュー派と積極的に交流を行っている。また、中国や韓国そしてタイの仏教界も活動の拠点をブリヤートに築こうとしている。

オーダム（大学院仏教学専攻博士後期課程3年）



イヴォルギンスキー寺院

～タイの仏教事情⑩～

— パーリ仏典のタイ語翻訳作業と出版の歴史と現状 (2) —

前号に引き続き、タイにおけるパーリ仏典の翻訳・出版について紹介したいと思います。第8回の記事では、タイにおける2ヶ所の仏教大学について触れましたが、各々の大学によって三蔵経とその註釈のタイ訳が続々と公刊されています。マハーマクットラージャヴィドゥチャラヤ仏教大学（以下、マハーマクット仏教大学と略す）により出版されたタイ訳は、マハーマクットラージャヴィドゥチャラヤ版（以下、マハーマクット版と略す）といわれ、同様に、マハーチュラロンコーンラージャヴィドゥチャラヤ仏教大学により出版されたものも、大学名を版名（以下、マハーチュラ版と略す）にしています。いずれの版も有名で、タイの仏教学者や一般者に愛用されています。



マハーマクット版

マハーマクット版は全91巻組で、現チャクリー王朝（1782年～）成立200周年記念として、1982年に出版されました。この版の特徴は、それぞれの経・律・論に対する註釈の訳を本文とは別に記すのではなく、本文の続きに記すところにあります。これにより本文の理解し難い部分のその註釈をすぐに確認できます。また、この版は、タイにおけるパーリ註釈の初の完訳で、タイの仏教学におけるマハーマクット仏教大学の偉大な業績であると思います。電子化もされ、インターネットからも閲覧できる利用しやすい資料となりました。筆者も註釈を参照するために、よく利用しています。

次に、マハーチュラ版についてですが、この版は、1971年に出版されたタイ文字パーリ経典45巻と同数の巻をもって、1992年に公刊されました。これは註釈の訳が付されていないものの、パーリ語が分からない読者でも三蔵経の内容を理解しやすいように、訳語については、マハーマクット版より分かりやすい現代語を使用しています。また、この版の特徴は、次のようです。

1. 各巻の冒頭には、それぞれの巻に収められている経・律・論の内容を概括しています。
2. 巻末には、訳語の索引があります。
3. 経番は、ミャンマーの第6結集版の経番と同様にしています。
4. 仏教用語や難解な語彙については、脚注をもって補助説明がなされています。
5. 訳語の統一性を高めています。

また、マハーチュラ版もマハーマクット版と同様に電子化されたので大変便利な翻訳書となりました。

上記の二つの版はいずれも相当の分量があり、仏教学者ではない一般の人々が全巻を読みきるのは、大変難しいという声が多くありました。そのため、マハーマクット仏教大学は、三蔵要約版を公刊するに至りました。これは45巻の経・律・論の内容を整理して簡潔に記し、800頁ほどの書籍にまとめたものです。そのおかげで、忙しい日々を追われている一般の人々でも、パーリ三蔵経の全体の内容を簡単に把握できるようになりました。



マハーチュラ版

プラチャップン (Phramahāchatpong Katapuñño)
大学院仏教学専攻博士後期課程3年

～コラム「日本文化と仏教」⑮～

江戸っ子は仏の教えも川柳で笑いのめす

仏教会会員 作家 永田道子

いまわたしたちが川柳と呼んでいるものは、江戸時代には前句付(まえくづけ)といい、お題である下の句に五・七・五の前句をつける連歌から派生した遊びだった。たとえば、「恋しかりけり恋しかりけり」のお題に「こしかたを思うなみだは耳に入り」とつける。素人が投稿して点者とよばれる選者が入選作を決めて景品を出す、いまの投稿ブームのはしりだったが、次第に前句なしの一句立が主流となり、人気点者の柄井川柳(からいせんりゅう)の名から川柳と呼ばれるようになった。

俳句が文語体なのに対して、川柳は口語体で季語もいらない。その手軽さがうけ、江戸庶民の自由闊達な気風にも合って風刺と機智を活かした滑稽で奇抜なものが好まれ、江戸中期には大流行した。生活や風俗を茶化したものや下世話なものが多く、庶民の本音を知るには俳句よりずっと面白い素材である。

本音をつぶやき、権威を笑いのめすという意味で、仏教が俎上にあげられないわけがない。

「もう五年おそいと達磨首ばかり」(『俳風柳多留』26巻 以下柳) 面壁跏趺坐九年、足が腐ってしまったという達磨大師。あと五年も頑張っていたら首だけになっちゃったね、と凡夫は酒かっくらって大笑い。

「人の見ぬ間にだるまも蠅を追い」(宝暦万句合 13) さぞ垢まみれで臭かったろうから蠅にしつこくまとわりつかれて、さすがの達磨さんも五月蠅(うるさ)くてかなわん、瞑想も途切れがちだったろうよ、と。

ちゃらんぼらんな江戸っ子には禅宗は高峰の花。というより、格好のからかい相手なのだ。

「山門に入らず裏門から運び」(柳 77) 「葷酒(くんしゅ)山門に入るを許さず」なので、裏門からこっそり。「ほねを残すから知れるとぜん坊主」(柳 18) 僧は肉食ご法度、まして禅宗は戒律が厳しいのに、こっそり食している。食べ残しの骨を人に見られてバレるのはさすがにまずい、と生臭坊主たちがひそひそ相談している。いっそ骨まで食ってしまえばどうか？

少しはまともなものもある。鎌倉の禅寺建長寺は掃除が行き届いていることで有名だった。

「此向(このむこ)うさと竹ぼうきにておしえ」(安永万句合 9) 夫から逃げて縁切寺の東慶寺へ駆け込もうとした女が、地理不案内の上、追手が迫っていると焦って近くの建長寺に迷い込んだ。竹箒でせっせと庭を掃いていた若い修行僧は、はたしてどんな顔で教えたのか。

「寒念仏(かんねぶつ)夫婦の中をさむがらせ」(柳 2) 寒念仏は寒中の30日間、山野に出て声高く念仏を唱える行。江戸時代には僧俗問わず、寒夜に鉦を打ち叩き、念仏や題目を唱えながら寺に詣でたり、有縁の家や付近を巡ったり、町中を練り歩いて喜捨を乞うのが流行った。盆の踊り念仏も真夜中に遠くから聞こえてくるとしみじみした風情があるが、真冬の寒念仏はことさらもの寂しい雰囲気がある。夫婦の寝室から妻が起きて行って小銭を渡してもどってきたが、戸を開けたせいで冷気が入ってきて寝つけなくなってしまったという句。寝床の中で鉦の音に無常を感じ、来し方のこと、これからのことなどあれこれ考えて、そっと溜息をつく。おそらく若夫婦ではなく中年か初老の夫婦。短編小説の一場面になりそうだ。

「遊女とはあんまり派手な化身なり」(柳 26) 大坂の淀川と神崎川の合流地点の江口の里は平安時代から交通の要所で、大勢の遊女がいる一大色町だった。その遊女は普賢菩薩の化身とされ、謡曲にも『江口』がある。普賢菩薩は白象に乗っているのがままりなので、派手に着飾った美しい遊女と白象の取り合わせの絵も数多く描

かれた。菩薩さま、いくらなんでも派手すぎやしませんか。そう揶揄したくもなろうというもの。

「凡人へ普賢の済度もってこい」(柳 50) とはいうものの煩悩まみれの凡夫にはしかつめらしいお説教よりずっとありがたい。さあさ、救ってください。菩薩行なのでから遠慮なさらず。

「わたしが内は仏とやたらさせ」(柳 69) 真面目な解説書は、うちの亭主はお人好しの仏さまみたいな人だから大丈夫よ、と女房が手当たり次第不義密通していると説明しているが、どうであろうか。如来蔵思想の川柳的拡大解釈と読めなくもない。凡夫の心中に仏性があり、煩悩即菩提、汚れと迷いも実は清浄、みな仏菩薩なのだと考えれば、不義密通も遊女の手練手管も仏菩薩の慈悲ということになる。

「おしゃかさま生まれ落ちるとみそをあげ」(『俳風柳多留拾遺』4巻 以下拾遺) 「みそをあげる」は自画自賛の意。「天上天下唯我独尊」とのたまうなんざ手前味噌の極みだよ、と。花祭りで可愛らしい赤ん坊の釈迦像に甘茶をかけながら、そんな不屈き千万なことを考えるのが川柳子なのだ。

「おびただし猫がくやみに来ぬばかり」(拾遺 3) 釈尊の入滅に、弟子たちはじめ、鬼神や鳥や獣たちがこぞって参集して嘆き悲しんだのに、猫だけはどこぞで眠りこけていて駆けつけなかった。不義理な不心得者と十二支に入れてもらえなかったという話、家の飼い猫がのうのうと寝ているのを見て思い出す。ネズミはちょろちょろ走って行ったぞ。龍や蛇だつてのたくりながら駆けつけたんだぞ。説教してみるが、もちろん聞いちゃいない。

「猿の因果の人によく似る」(『眉斧日録』3) 猿ってやつは何の因果でよりもよって人間に似るなんて不運な目に遭ったんだろうね、気の毒に。猿回しの曲芸でも見て同情したか。ほれ、あのふてぶてしい態度、憎たらしい顔しやがって、あいつにそっくりじゃないか、などと人間に似ているばかりに笑われたり、憎まれたり。

「念力の度に仁王はきたながり」(拾遺 3) 「また紙をかむかと仁王にらみつけ」(柳 115)
紙を噛んで仁王像に投げつけると力が強くなるという俗信があった。仁王さまはいい迷惑。

「燕(つばくろ)はぼん字のよにとんで行き」(明和万句合 5) たしかに燕は曲芸みたいに身を翻して飛ぶ。初夏の墓参り、頭上を子育て中の燕がしきりに飛び交っている。ふと、卒塔婆の梵字に似ているなど。

「六阿弥陀みんな廻るは鬼ゞあ」(柳 23) 六阿弥陀を一巡すると七里半(約 30 キロ)。これを1日で歩くのはえらく足達者の婆さま。当分死にそうもない。

「六ばん目よめのうわさのいゝじまい」(安永万句合 4) 口もすこぶる達者だけど、最後ともなるとさすがに疲れたし、そろそろネタも尽きた。また今度、嫁の悪口を言い合って発散しましょうよ。約束して帰路に着く。いまだと日帰りバスツアー。

「遠い寺もうじゃをそしりそしり来る」(柳 23) 葬式をする寺まで歩いていく。浮世のつきあいだから仕方ないというものの、夏の真っ盛り、汗だくで歩いているとむかつ腹が立ってくる。故人の生前の所業をあれこれ悪口を言い合いながら歩く。いつしか仏から亡者にされている。

寺とのつきあいは現代よりはるかに濃かったから、その分、いろいろとむずかしい。

「旦那寺くわせておいて扱(さて)という」(柳 4) 檀家の者に食事を出してくれるのはいいけれど、その後に「さて」と切り出すのはきまって寄進のこと。はめられた気分。

《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・『絵解き般若心経』

渡辺章悟/著 (ノンブル社 4515 円)

「釜」を逆さまにした絵は「まか」、「般若」のお面の絵で「はんにゃ」、ぼっこり出たお腹の絵は「はら」。ここまでで、この絵の連なりは「まかはんにゃはらみた」を表しているんじゃないか、と気付く方も多だろう。これは、文字を学ぶ機会の少なかった東北の人々に親しまれた、「絵と音で読める般若心経」である。信仰の一形態である「絵心経」について本学の渡辺章悟教授が説き明かす。

・『荻原雲来と渡辺海旭—ドイツ・インド学と近代日本』

西村実則/著 (大法輪閣 2940 円)

明治時代、在家から僧となり、サンスクリット学、仏教学の世界的権威となった人がいる。荻原雲来と渡辺海旭である。この二人はドイツに留学して起居を共にし、ドイツの師が菩薩と呼んだほど刻苦精励した。本書は当時ドイツに留学した人びととこの二人のドイツ体験を追ったものである。

・『図説 チベット密教』

田中公明/著 (春秋社 3360 円)

難解なチベット密教を「歴史・人物」「文献・教理」「尊格・美術」「儀礼・実践」の四つの面から明快に解説し、一九九三年の刊行以来、版を重ねてきた『チベット密教』。この書を最新の研究成果にもとづき全面的に増補・改訂し、図版・カラー頁ともに大幅に増加。さらにレイアウトも一新して、ビジュアル面の一層の充実をはかった決定版。

・『チベットの仏教美術とマンダラ』

森雅秀/著 (名古屋大学出版会 12600 円)

インドの伝統を汲む長い歴史と多様な姿をもち、「聖なるもの」を独特のかたちで表現するチベット美術。その知られざる豊饒な世界を、学際的視野から包括的に捉え、アジアの仏教美術と文化史のなかに位置づけた画期的労作。カラー写真を中心に未発表作品を含む多数の貴重図版を掲載する。

・『近代仏教という視座』

大谷栄一/著 (ペリかん社 5250 円)

古代以来の仏教伝統+明治以後の宗教概念の成立=「近代仏教とは何か?—日本仏教史の傍流や近代思想の周縁ではなく、近代日本の精神的支柱として近代仏教を捉え、明治から昭和の青年たちを動かした宗教改革・政治参加・アジア主義・超国家主義および反戦運動の諸相を分析することで、近代思想史研究の新たな可能性を開拓する。

○《イベント》

7月から9月にかけて行われる仏教イベントを紹介します。本格的に暑くなってきておりますので、熱中症対策などご自愛の上でお出かけ下さい。

● 東京中国文化センター「遣唐使慈覚大師 円仁展」

世界三大旅行記の一つと称される『入唐求法巡礼行記』を著した円仁の1150年御恩忌記念、並びに日中国交正常化40周年記念として、「生の中国を初めて伝えた人—慈覚大師円

仁・文化は国を超える—」をテーマに展示会及び講演会が開催される。

日時：7/23(月)～8/20(月)

10時30分～17時30分

住所：港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F

※休館日は土曜・日曜、入場料は無料です。

〈イベント〉

(1) 7/26(木) 講演会・シンポジウム「慈覚大師を語る」

(2) 8/8(水) 13時～ 天台声明「慈覚大師御影供」と雅楽のセッション

(3) 8/10(金) 13時～ 講演会「天台と茶の湯」

* イベント参加には事前申込が必要です。天台宗務庁内の天台宗祖師先徳續仰大法会事務(TEL077-579-0022)までお問い合わせ下さい。

● 武蔵野大学仏教文化研究所公開講座「ひろさちや先生をお迎えして～お浄土とは何か」

武蔵野大学仏教文化研究所で年一回行われる公開講座。今年ひろさちや先生を講師に、「お浄土とは何か」という講題で行われる。

日時：8/4(土)

13時30分～15時

会場：武蔵野大学 武蔵野キャンパス5号館グリーンホール 東京都西東京市新町1-1-20

聴講無料・申込不要

● 成田山新勝寺 第28回仏教文化講座「仏教の年中行事」

成田山新勝寺で行われる全十回の講座。各回、「仏教の年中行事」をテーマに、毎月第二土曜日に開催される。

日時：9/8(土)～6/8(土)

13時～15時

受講料：1講座1,000円

場所：成田山新勝寺 大本堂第1講堂

千葉県成田市成田1-1

● 浅草寺仏教文化講座 第681回

第1講座(午後2時)「個人個人に適した医療—より効果的で副作用のない治療を」

シカゴ大学医学部内科・外科教授 中村祐輔

第2講座(午後3時)「精進料理が育むこころ～道元禅師『典座教訓』を読む～」

駒沢女子大学教授 千葉公慈

日時：8/22(水)

13時開場

観覧料：無料、予約不要

会場：新宿明治安田生命ホール(新宿駅西口)

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先にお願いいたします。(会員は無料で参加できます。)

《語学勉強会》

○仏教漢文講読会

講師：橘川智昭

日時：隔週木曜 4 限

『大乘起信論』を読みながら漢文の読み方と仏教の思想を学びます。参加希望者は橘川<kitsukaw@ff.iij4u.or.jp>までご連絡ください。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日の 6 限

『アヴァダーナ』を読みます。初心者大歓迎です。

○チベット文献講読会

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18:30～20:00

内容：ツォンカパの『ラムリム』「菩提心の儀軌」の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。

会場：6号館 4階 6408教室

参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

*＜語学勉強会＞は資料等の準備がありますので、参加希望者は各講師もしくは仏教会事務局長宛まで、あらかじめご連絡下さい。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ (<http://www.toyo-yimba.org>) をご覧下さい。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集後記

「まいとりに」編集長の鈴木です。昨年度春号の No.12 から今回の No.17 まで編集作業をさせていただき、今号をもって編集長を後任者にバトンタッチいたします。「まいとりに」愛読者の皆様、並びに執筆者の皆様には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。おかげさまで「まいとりに」は、気がついてみれば国際色豊かな他に類を見ない個性的な内容の冊子となりました。編集作業に携わりながら世界各国の仏教事情についてうかがい知ることが出来たことは大きな喜びです。今後とも「まいとりに」並びに東洋大学仏教会・仏教青年会をよろしく願いたします。

編集責任者：文学部インド哲学科 4年 鈴木伸幸

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第 8 研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>